

川村雅則ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ

KAWAMURA Masanori Seminar I・II

参加学生数 13人



川村 雅則

経済学科
准教授

特別養護老人ホームにおける介護労働者の労働実態調査

【事業申請名称】 地域の労働組合等と連携した保育労働や介護労働の在り方に関する調査研究事業

●連携内容

特別養護老人ホームで調査を行った。今回のような調査研究は、関係者の協力なくしては実現不可能である。第一に特養の施設長から、聞き取り（札幌市内の特養29カ所）と、アンケート（道内の特養81カ所）の協力を得た。第二に、特養施設長ならびに今回の事業連携先である札幌地域労組から協力を得て、介護労働者からアンケートを集めた（合計851部の回答）。また札幌地域労組には、12月の介護シンポジウムで、介護現場の実態を報告していただいた。

●キーワード

1) 介護報酬：介護サービス事業者や施設が、利用者にサービスを提供した際に、対価として事業者支払われるサービス費用のことです。介護報酬は各サービスの基本的なサービスの提供にかかる費用に加えて、各事業所のサービス提供体制や利用者の状況等によって、加算・減算される仕組みになっています。また、3年ごとに改定されます（2003年の改定は-2.3%。2006年改定では-2.4%）。

2009年の改定では、介護保険制度制定後では初めてプラス改定（+3.0%）となりました。これは介護従事者の処遇の改善を目的としたものです。

2) 介護職員処遇改善交付金：2009年度の介護報酬改定に加えて、他業種・職種との賃金の格差を是正し介護力員のさらなる処遇改善を図るために事業者への資金（常勤換算の介護職員1人当たり月額平均1.5万円）の交付を行ったものです。

※以上は、厚生労働省ホームページに掲載された説明に手を加えたものである。

●研修地・研修日程 札幌市

8～9月	札幌市内の特養で施設長から聞き取り調査
9～10月	道内の特養の施設長ならびに介護労働者を対象にアンケート調査を実施
9～12月	調査結果のとりまとめ作業
12月	調査報告書（『介護に希望と笑顔を一知ってください 介護を支えるひとたちのこと』）を発行。シンポジウム（「介護地獄はもうごめん!!介護に希望と笑顔を!! part2」）を開催

研修目的

介護を必要とするひとびとが増えている。が、その担い手である介護労働者の確保が困難な状況にある。その背景には一この間のマスコミ報道等でも知られるようになったとおり一生活するのに困難な低賃金、人手不足・夜勤など過重労働負担の問題などがある。そうした状況の改善のために、2009年度にははじめて介護報酬が増額改定され、介護労働者の処遇改善を目的とした交付金制度も設けられた。これで状況は改善されると期待もあったが、依然として現場は厳しい状況にある。その実態を明らかにして、介護・介護労働の改善に貢献することを目的とした。

総 括

両調査（聞き取り、アンケート）からみてきた、介護現場の問題や改善課題等を報告する。

第一に、介護報酬の増額改定・処遇改善交付金制度の設置で介護現場が一息ついたのは確かである。給与の改善が多く職場で行われていた。しかしながらそれは、施設によっては、過去の減額改定にともなう労働条件の切り下げを補うものであるなど、なお十分な水準にはほど遠い。今回の報酬改定が全体の底上げではない（基本報酬の改定ではない）ことや、改定幅が十分でないため、人件費に全てをまわすわけにはいかないという施設側の苦悩もある。

第二に、賃金の改善を感じさせないほどの労働負担の増加という問題がある。利用者の要介護度の重度化・医療行為を必要とするケースの増加など、働く側の負担が増しているのだ。ただでさえ、介護現場は人手不足で一その背景には、不十分な人員配置基準という、制度的な欠陥がある一、思うような介護ができないという悩みがあったが、そこに拍車がかかっている。提供される介護の質の改善のためにも、労働負担の解消が急がれる。

第三に、上記の点とも関わるが、労働者の過労・健康面の問題が深刻である。極端に人手が不足する中での夜勤負担・ストレス（しかも月にそれが4,5回も）、慌ただしい現場で不穏になった利用者や認知症の利用者からの虐待、利用者家族からの理解が得られないことなどが、介護労働者の疲弊を増幅させている。慢性的な疲労を訴える彼らの声には、介護現場の持続可能性の危機が示されている。

ほかにも、同じ仕事をさせていながらも非正規雇用で雇わざるを得ないことや、相次ぐ離職と残された労働者の負担増という悪循環など、現場の疲弊が調査を通じて明らかになった。

もっとも、そういう中でも、介護労働者をはじめ関係者は利用者の生活改善・権利擁護に献身的につとめている。わが国の介護を支える役割を彼らだけに押しつけるわけにはいかない。社会全体で支える必要がある。そのためにも、もっと介護現場のことを市民に知ってもらおう。

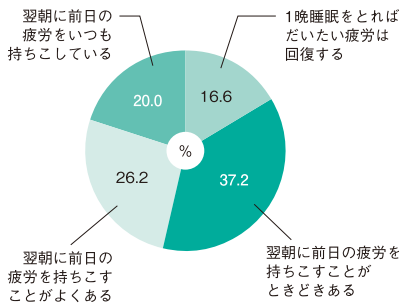
そうした問題意識で、第一に、学生が中心となって、報告書を作成した。

(<http://www.econ.hokkai-s-u.ac.jp/~masanori/2010kaigo> からダウンロード可)。

第二に、授業時間を使って、事業連携先である札幌地域労組と公開シンポジウムを開催した。市民の参加もあり盛況に終わった。また当日のようすは業界紙などでもとりあげられた。

介護現場はこんなに大変 ― 調査報告書「介護に希望と笑顔を」より

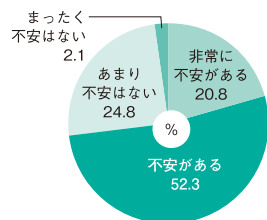
最近の疲労の回復状況 (n=833)



夜間眠らない利用者、徘徊する利用者が増え、負担が倍増した。休憩時間は2時間設定されているも、ほとんどとれない。しかも、夜勤明けは休みとみなされ、次の日は大体が仕事（早番）があり、全く疲れがとれない。
女性／20歳代



健康や体力面での不安の有無 (n=838)



重度の利用者と軽度の利用者が混在しており、夜間のコール対応が大変である（夜間のトイレ誘導だけで20回以上）。オムツ交換・体位交換は50回ほどあり夜勤での休憩は1分もない状態であり、人手不足で夜勤明けで残業している。
女性／40歳代

認知症の利用者が多く、ナースコール対応が多く、不穏利用者による転倒事故予防に追われ精神的負担が大きい。
男性／50歳代

学生研修記

【介護労働者の「思い」を保障するために】



佐竹孝紀

経済学科2年
紋別北高校出身

介護保険制度が導入されてちょうど10年を迎えました。2009年には介護報酬がプラス3%改定され、介護職員処遇改善交付金がつくられるといった介護の現場での制度的改善が行われました。そうした改善が実際の介護の現場でどのような影響を与えたのかなどを明らかにするために今回の調査を行いました。まずは、札幌市内46カ所の特別養護老人ホームのうち29カ所に訪問させていただき、施設長からお話を聞きました。次に、道内の特養の施設長と介護労働者にアンケートを送付し、回答してもらいました。また、その結果をより多くの人に知ってもらいたいと思い、報告書も作成しました。

介護の現場で問題となっているのは仕事の内容・時間に合わない低賃金、長時間労働から来る精神的・身体的疲労、それがゆえに離職が多く、新たな働き手が見つかりにくくなっていることなどが挙げられます。2009年度の改定では多くの施設で不十分であるとの声を多く聞きました。実際に働いている多くの介護労働者の方々は「やりがい」を持って働いています。「利用者にいいサービスを提供したい。」「お年寄りとかかわりたい。」そうした労働者の人たちの「思い」によって成り立っています。そうした労働者の「思い」を保障するために制度をもっと充実させていく必要があるのだと今回の調査で強く感じました。介護労働者が働きやすくなることは利用者にはいいサービスを提供できることにもつながります。利用者の目線で介護を考えることは重要です。しかし、そこに利用者を支えている介護労働者がいることを常に忘れてはならないのだと思います。

そしてこの問題は私たち一人一人が考えていくべき問題であると思います。私たちの調査で介護の現場を多くの方々に知ってもらえることを強く願っています。

【介護調査・研究を体験して】



石上千里

経済学科2年
富良野高校出身

私たち川村ゼミの地域研修のテーマは、介護でした。

今、なぜ介護を調査したのかというと、2010年は介護保険制度が始まってちょうど10年目の年でした。また、2度の改定のたびに減額されていた介護報酬が初めて3%増加したことや、介護職員処遇改善交付金制度が創設されたことなどは介護の現場にどのような影響を与えたのかを明らかにして、介護現場の実態を多くの人に知っていただきたいからです。

はじめに、本を読んで介護について学びました。その後に、実際に札幌市内の特別養護老人ホームを訪問して施設長さんなどからお話を伺いました。それと並行して全道の特養の施設長さんと介護労働者に対してアンケート調査も行いました。

どの施設でも、休んだり止まっている介護労働者を目にするのではなく、常に動き続け、常に利用者さんの対応をする介護労働者の様子を見て、いかに現場が大変なのかということを改めて実感しました。

私は、この調査を行うまで介護に関心がなく、ほとんど考えたことはありませんでした。

しかし、今回の調査を通して介護現場の状況を知り、想像以上に大変な状況にあることを知りました。今回の私たちの活動によって、一人でも多くの人に介護の現状を知っていただき、介護の労働環境が少しでも良い方向に変わっていくことを心から願っています。



川村ゼミ報告書 2010.12 発行

●札幌地域労組の概要

今回、事業連携した札幌地域労組は、「札幌近郊の約100職場に単組・支部を置き、約2,900名の組合員が加盟」しており、「あらゆる職種、階層の労働者に門戸を開いて」いる労組である。介護労働者も数多く組織している。労働組合である以上、労働条件の改善に取り組むのはもちろんのことであるが、同時に、特養で暮らす利用者の生活改善・権利擁護という観点で運動を進め、業界の発展・改善に大きなインパクトを与えている。
<http://www.infosnow.ne.jp/~sgu/>

なお、文書での連携こそしていないが、多くの特養施設関係者にご協力をいただいたことを記しておく。

写真キャプション

①② 事前準備中。③ 聞き取り中。④⑤ 学内で行った「介護現場はどうなった? 介護現場の検証とこれからを考えるシンポジウム」。

